

深夜の芋掘り

夜の学生寮はとにかく退屈しない所である。いや正確に言えばそうならないための方法を必死で考える故、退屈しなくても済むのかもしれない。

秋の夜長の寮生の考える事は、例え経済論をぶっつけていようが、高邁な哲学を論じていようが最後は腹が減ったという議論に集約するのが常であつた。

最近は深夜営業の飲食店も珍しくはないが、私の学生時代はそんな気の効いた店など全く無く、救いの綱は高崎駅の構内にある立ち喰い蕎麦屋くらいなものだった。しかしこれとても自転車で三十分の労働を強いられるし、辿り着いたものの閉店していたりして、帰り道は死にたくなるほど惨めな思いをする事もあつた。

そんな中で確実に空腹を満たすものが烏川の土手の向こうの芋畑であつた。今にして思えばお百姓さんのご苦勞を思い、恐縮の至りではあるが当時は生きるための闘いがそこにあつた。

特攻隊二名に選ばれるのは、いつも決まって一年生だった。デパートで貰った紙袋をさげて軍手をつけ、夜陰に乗じて出撃するわけだが件の芋畑までは二つの土手を越え、さらに小川を一つ飛び越えなければ行けなかった。

群馬の秋はことさらに空気が冷えて澄んでいるものだから星は美しかった。その星明りの下での芋掘りもまたオツなものと考えるのは寮で待つ上級生のゆとりというもので、当の一年生といえば、軍手をつけて畝の横から手を差し込み芋の大きさを確かめては一つずつ収穫し、その後の穴を再び埋め直す作業の繰り返しなものだから、風流なぞと言ってる暇はなかった筈である。

そうした或る日、悪い奴はいるもので当番の一年坊が一生懸命、芋を掘っている現場で畑の所有者を装って「コラー！ ドロボー！」と派手にカマシタ奴がいた。おまけに持って来た木刀を所構わず振り回したものだから、驚いたのは哀れな一年生であった。さすがに折角の芋を忘れる者はいなかったが、紙袋をさげて一目散に逃げて行く後ろ姿にはインテリジェンスなど微塵もなかったという。

人は狼狽すればロクなことにはならないもの。暗闇を逃げ帰る途中の小川を飛び越えた途端、はずみで紙袋の紐が切れ、芋が全部そこいらに転がってしまった。暗闇のなかの土もぶれの芋だから探してもなかなか見つからない。すぐ後ろの追手の迫力にたまらず寮に逃げ帰って来るのであるが、待っているのは上級生のバカ笑いの渦のみであった。

私とそのバカにされた一年生の一人であった事は言うまでもないが、悔しかったのは名誉でも何でもなく、芋を落としてしまった事だったと記憶している。上級生のイ

タズラと判明した後、今度は懐中電灯を持って落とした芋の回収に向かったが、現場でふと見上げた星空は、本当に美しかった。

翌年、上級生になった私が逆の立場で同じ事をしたのは言うまでもないが、ただその年の一年生は芋をバラ撒いたりはしなかった。